

大阪 需要停滞続き弱気ムード払拭できず

(大阪) 大阪地区の鉄スクラップ市況は弱含み様子見。今月の電炉需要は先月以上に冴えず、輸出を含めた外部環境も持ち直しへ向かう好材料が見当たりにくいため、先行き懸念は緩まる気配にない。2日時点での地区H2実勢値は4万～4万1000円見当で推移している。

地区内では先月後半の値下げを機に、荷動きに落ち着きが見られる。複数の電炉筋が予約納入で実質的には制限を行っているにもかかわらず、湾岸筋の安定集

荷やスクラップ発生薄の影響により、荷余り感は台頭しておらず、地区要因では動意材料を欠いている。

ただ、今月の電炉生産は21万トンの台への落ち込みが想定されており、需要の下振れが避けにくい展開にある。アジアミルの調達意欲も総じて低く、輸出商談はいまだ地区相場を下回っているため、「内外ともにムードが悪いだけに、下方圧力は再び強まってくるのでは」(商社)と見る向きが多い。

大阪 7月生産は2カ月ぶり21万トンの台へ低迷

商社推定によると、大阪と和歌山を合わせた7月の電炉生産量は21万5000トンの前後にとどまり、6月の当初計画比で11.0%(2万6600トン)減、前年同月比でも7.4%(1万7300トン)の減少となる。4カ月連続で前年水準を下回るだけでなく、7月としては2000年代以降で最も低く、25年度に入ってから生産レベルの低下が目立つ展開となっている。

6月は5月からの一部の長期炉休が終了となり、他も夏場を前に生産水準を高めてきたことにより、当初計画では24万1600トンと5月実績比で約3万トンの増加が見込まれていた。しかし、複数の電炉筋が計画を下方修正する動きもあり、実質的には23万トンの台にとどまったと

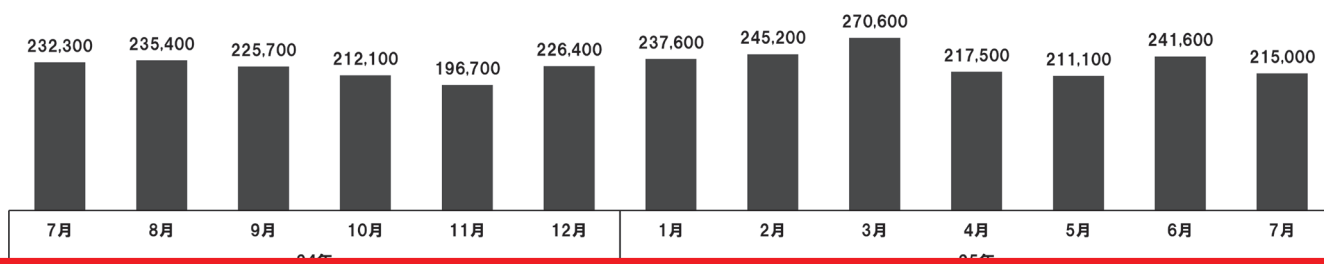
推測されている。

7月は再び21万トンの台への落ち込みが見込まれている。7月は季節的にも複数電炉が炉休入りとなるが、今年については7月の長期炉休予定が1社しかない。それでも炉休期間が例年に比べて長く、炉休以外の電炉筋も製品受注の低迷によって、6月比で生産減を予定しているところが多いことで、大幅な落ち込みとなる。8～9月にかけては電炉による炉休予定が集中しているため、こうした環境が鉄スクラップの需給や市況にもさらなる悪影響を及ぼしそうだ。4-7月期の生産で見ると、直近では過去最低であった09年(85万6100トン)に次いで低いペースとなっている。

大阪電炉の生産推移

単位:トン

※25年6月と7月は計画



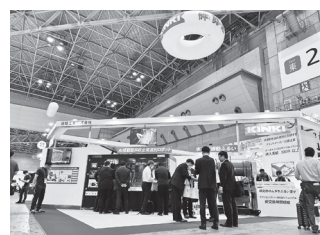
近畿工業、2025NEW環境展に出展 来場者は1,000人超え

(兵庫) 破碎機・選別機メーカーの近畿工業(本社=兵庫県神戸市、和田知樹社長)は、5月28日から30日に東京ビッグサイトで開催された2025NEW環境展に出展し、ブースには1,000人を超える金属リサイクルや産業廃棄物処理事業者などの業界関係者らが来場し、今年も大盛況に終わった。

今回は、3Dモデルによるリサイクルプラントの紹介のほか、AI搭載型非鉄選別ロボット「V-PICKER」、二軸せん断式破碎機「SHRED KING」、「水平型振動ふるい機(NLH型)」、実機の4分の1サイズの模型となる小型工業雑品用シュレッダー「V-BUSTER」を展示。ブースでは、「V-PICKER」の実演が披露され、高度な選別精度に来場者らは大きな関心を示していた。ま

た2017年の販売開始以降、金属リサイクル業界を中心に納入実績を伸ばしている「V-BUSTER」についても、小型の工業系雑品や小型家電などの複合物の単体分離に優れていることから、同機にも注目が集まっていた。

同社は同イベントへ定期的に出展し、機械の動きや実機による迫力を体感できるブースづくりを心掛け、来場者らの高い評価を得ている。こうしたことから、同社は今後も積極的に広報活動を展開し、市場シェアの拡大に注力していく方針だ。



ブースの様子